

梁山泊の 生命線を握る男。

新・農業経営者ルポ / 第46回

(有)ユニオンファーム 総合企画室
取締役室長 農学博士

杜 建明

茨城県小美玉市

ドウ・チェンミン●1962年中国江蘇省生まれ。85年南京農業大学農学研究科修士課程修了後、同大学食品科学部で助手・講師を務める。その間、イタリアのポローニャ大学、ミラーノ大学へ留学。94年来日、筑波大学へ留学。98年筑波大学農学研究科博士課程修了後、農業資材の販売を行なう新進(株) (後に合併してアイアグリ(株))に入社、農業技術チームで主任研究員を務める。2004年8月から現職。

梁山泊の生命線を握る男。

「アイアグリ」は、茨城県を拠点とする農業資材の販売会社だ。2000年、玉造和男社長の肝煎りによって、研究農場「ユニオンファーム」が設立される。取締役室長として抜擢されたのが、アイアグリの主任研究員として働いていた杜建明だった。和男が力強い牽引力を見せる太陽だとするなら、建明はそれを陰から支える月だった。国籍は違えど、農業に対する2人のベクトルは、くしくも一致していた。そこに誕生したスベシャリスト集団は、まさに「梁山泊」と呼ぶにふさわしい。

取材・文／李春成 撮影／編集部

冬の昼下がりである。外の気温は、およそ5度といったところだろうか。つい1週間ほど前にも、関東圏は大寒波に見舞われたばかりだ。しかしハウスの中は、まるで春だった。黄色い小さな花卉をつけた茎を指先で折ると、彼は筆者を見上げた。「今が旬の野菜なので、とても美味しいですよ。ちょっとかじってみてください。大丈夫ですよ、有機栽培ですから。このまま食べられます」

文革新風の一過後 鄧小平が学生たちを救った

おひたしである。菜の花ほど茎が硬くないため、熱湯でさっと茹でるだけの手軽さだ。おひたしの定番である、醤油に鰹節を振りかけてもいい。醤油に粉がらしをまぶして、からし和えにすれば、格好の酒の肴となる。豚肉とニンニクの芽を加え、紹興酒とオイスターソースで炒めてもみた。中華風小皿料理の出来上がりだ。痛み付きになる菌ごたえと甘い味覚だった。

手渡された緑色の茎を、ひと口かじってみた。とたん、奥歯に自然の甘さがじわりと広がる。サカタのタネが、わずか数年前に開発した「紅葉苔」という野菜なんだという。そのため、あまり市場には出回っていないそうだ。事実、食料品をよく購入する筆者でさえも、その名を耳にするのは初めてだった。

試供品を2束ほど家へ持ち帰って調理してみた。最も口に合ったのは、

上野駅から常磐線の特急で約1時間、霞ヶ浦の北部にある石岡市は、1300年の歴史をもつ地方都市である。『常陸国風土記』によれば、その昔、この地に住みついた武将が茨棘で造り上げた城塞を根城にして侵入者と闘ったという。これが、現在の県名「茨城」の由来となっているらしい。土浦と水戸といった都市

に挟まれながらも、伝説に従うとするなら、非常に由緒正しき土地柄というわけだ。石岡駅からクルマで約20分、今回の訪問先であるユニオンファームは、細々とした林道の一角にあった。とびきりの笑顔で出迎えてくれたのが、筆者に紅葉苔の味を教えてくれた杜建明だ。総合企画室の取締役である。中国や韓国では、親しい間柄になると下の名前で呼び合う習慣がある。日本でいえば「アキラ」とか「ヤスシ」などと声をかけるようなものだ。本稿でも親しみをこめて、「建明」と呼ぶことにしたい。なお、彼は今年で来日15年目となるが、夫の曹曉紅のほうがかはるかに日本語が堪能だという。この日も、時折り聞き取りにくい箇所があった。そこで建明の言葉には便宜上、僭越ながら筆者が手を加させてもらった。「私は農家の生まれで、子どものときから動植物が大好きだったんです。そういう経緯があって大学でも植物を専攻したんですが、けっきょく36歳まで大学にいることになってしまいました。自分が選択したものが、最後まで好きだったんですね」なるほど、紅葉苔の茎をつまんだ彼の指からは、植物に対する深い愛情が伝わってきた。天は二物を与え

ず。現在の仕事は、彼の天職だったにちがいない。建明が生まれたのは、江蘇省の名勝として知られる太湖付近に位置する王干村という農村だった。雨量が多く、見渡すかぎりの水田地帯が広がっていた。同省最大の都市が、南京である。植物の魅力に心を奪われたまま成長した建明が、南京農業大学に進学したのは、ある意味必然だった。南京農大は、中国農大（当時・北京農大）に次ぐ国内ナンバー2の大学であり、約10000キャンパスにおよぶ中国すべての大学を合わせても、そのレベルは30〜40位以内にランクされるエリート校だ。彼にとつて運が良かったのは、文化大革命がほぼ終焉を迎えた直後に入学したことだろう。66年の紅衛兵結成を発端として始まった文革は、約10年間のあいだに知識階級を中心に、1000万人以上もの犠牲者を出したといわれる権力闘争だ。革命期間中に入試制度は崩壊し、高等教育の現場はほとんど機能停止に追い込まれた。文革が国の将来に与えた影響は大きい。「このために中国の発展は20年後退した」と唱える専門家もいるほどだ。この動乱のさなかに、高卒年齢が

は78年、16歳で大学に進学した。カリスマだった毛沢東が死去し、その腹心といわれた江青をはじめとする「四人組」が逮捕された2年後だ。

時の政権は、鄧小平へと移っていた。

建明が懐かしそうに目を泳がす。

「革命中の教育は、技術者に重点が置かれていました。研究者を育成することがなかった時代だったんです。だから短大生しか育てていません。ところが毛沢東のあとを継いだ鄧小平が、大学の再強化に乗り出したんです。幸いなことに私が入学した当時は、文革以前から教鞭をとっていた先生がまだ残っていました。国が貧乏で、大学施設に投資する資金も枯渇していたような時代でしたが、教育レベルそのものは非常に高かったんです。その意味で、私たちの世代はいい教育を受けることができた。つまり、鄧小平のおかげなんです」

82年に農学部を卒業したが、建明の探求心が衰えることはなかった。そのまま大学に残って修士課程に進み、さらに研究室の助手と講師を務め、94年までを南京で過ごした。けつきよく16年もの長い月日を大学生活に費やしたことになる。何事も諦めない持久力や、後進を育成する指導力は、おそらくこの時期に培われたものなのだろう。

旧農家という「王朝」に挑む 農業の「梁山泊」誕生

農業への探求心を高めるきっかけとなった最初の出来事は86年、イタリアのポローニャ大学、ミラーノ大学への留学だった。FAO（国連食糧農業機関）には、発展途上国の若手研究者を支援するための奨学金システムがある。ヨーロッパの農業先進国に留学生を受け入れてもらい、途上国の農業関係者に刺激を与えようというものだ。エネルギーと同じで、食糧は人類共通の必須項目だ。世界の人びとが等しく歩まなければならぬ「命」の問題だった。

この制度を利用してイタリアへ渡った建明は、中国との格差を目の当たりにして強い衝撃を受けている。

「果樹の研究をしたかったので園芸学部に着を置くことにしたのですが、驚いたのは農業技術だけじゃありませんでした。生活全般において、あらゆる事象が新鮮で、大きな驚きがありました。『こんなにも差があるのか』と思いましたからね。今の中国は急速に発展していますが、いまだに発展途上国といってもいいんじゃないでしょうか」

文革による「20年の後退」がなければ、この差はとうの昔に埋められているべきものだったのかもしれない。

しかし冷静な研究者だった建明はイタリアでの経験を通じ、謙虚であることと、「航海」の快適さを知ったにちがいない。その年の秋に帰国した彼は、やがて次の航海へ向けての旅支度を始める。それが94年、筑波大学への留学だった。

だが彼が乗った船の羅針盤が、これほど大きく振られることになろうとは思ってもみなかったのである。

農業資材会社のアイアグリ社長、玉造和男が中国から来た留学生に関心を惹かれたのは、今から10年以上も前のことになる。たまたま建明の恩師と親交があり、彼が秘めた才能に賭けてみる気になったのだ。

ユニオンファームの代表取締役、玉造洋祐が当時の父親の気持ちに代弁する。

「どの分野でも同じですが、流動的に動く社会には将来性があると思うんです。ところが農業ってというのは、閉鎖的な社会ですよ。でも現状維持のまま新しい農業者を促進していくか、壊滅寸前のところまで来てる日本の農業に未来はありません。そこで資材会社のアイアグリが農業現場にも一石を投じようとするわけですが、新たに参入するためには、少なくとも理論武装することが必要でした。だけど我われはサラリーマンでしたから、頭では勉強し

ていても、実際にやったことがないから現場がわからない。その点、杜さんは理論の集大成でした。この人だったら、新しい会社の未来を任せられるんじゃないか、父はそう考えたんじゃないでしょうか」

農業社会は一子相伝である。「動かぬ土地」から「進歩を続ける技術」にいたるまで、すべてが一家のなかで相続されてゆく。しかし玉子は、割らなければオムレツができない。アイアグリが旧態依然たる殻を破って勝負するためには、せめて先輩たちと同じスタートラインに並ぶ必要があった。なにしろ周囲には、その道50年、80年、場合によっては何百年という歴史をもった農家も含まれる。普通に考えれば、すでに結果を出し始めている実力者たちへ対等の闘いを挑むのは、およそ無謀な行為といえた。体力にも限界がある。5年、10年といった時間をかければ、母屋がもたない。そう思い悩んでいた和男の前に、杜建明という男が現れたのだ。

建明の和男に対する気持ちも、また揺るぎがない。国境を越えた、相思相愛の関係が築かれていた。

「農業は、食糧です。食糧は命の問題ですから、お金で計ることができないんです。そこに早く気づいていかないと、日本の農業に発展はな

梁山泊の生命線を握る男。



①



②



杜建明を行動させるのは、農業に対するあくなき探求心だ。母国への想いを馳せながら、彼の船は大胆な舵さばきを取ってきた。①86年のイタリア留学時代。②87年から7年間、南京農大の講師を務める。③筑波大学でのブルーベリー定植作業。④00年のカナダ農業研究視察。⑤98年に農学博士号取得。⑥来日時に6歳だった長女の文霏は、今年18歳になる。



⑤



③



④

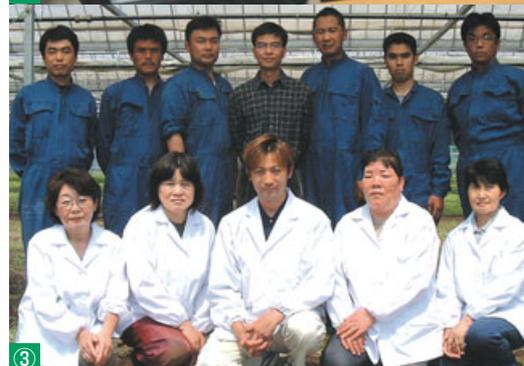




①



②



③



④



⑤

いと思います。たとえば日本の全農産物に占める有機栽培の比率は、0・17%です。1%もないんです。イタリアやオランダ、フランスなど、ヨーロッパの農業先進国では5%以上が当たり前です。日本の農業現場には、新しい発想をもった若い人が少ない。日本の有機栽培が立ち遅れているのは、それが原因だと思っています。今の流れでいくと、やがて後継者がいなくなります。将来がとても心配ですね。そこで和男社長は、ユニオンファームを核とした新しい農業従事者を育てようとしたんです。繰り返すになりますが、事業というものは、お金だけで測定できるものではありません。とくに農業はライフの問題ですから、同じ1・2億の売り上げがあっても、異業種の大手企業と我われとでは、人間社会と自然環境に対する貢献度が違います。要するに和男社長は、大儀のもとに経済

的なリスクを負ってる。自分で決めたことを、強い意志で行動へ移していける人です。一方の私は、人生のリスクを負ってます。リスクが軽い人は、1人もいません。お互いに稀れな人間なんですよ。だからもし人が変わったら、同じ条件での組み合わせを考えなければ、この事業はうまくいかないでしょうね」

彼ほどのキャリアだ。もし中国に帰国していれば、ラクに仕事をもらっていただろう。98年に決意した建明のアイアグリ入社は、農業現場における梁山泊の誕生だった。いわば彼は、茨城県リジビョウの林沖リジビョウになったわけだ。

中国へのFC事業逆輸入は日本よりも可能性大

建明が生まれた王千村は、江蘇省の宜興市イインシにある。市の面積は東京都や大阪府とほぼ同じで、春秋戦国時代から5000年の歴史をもつ古

都である。今では野菜農場が主流だが、建明の少年時代は、そこかしこに点在する果樹園が古都の風景に明るい彩りを加えていた。

彼が筑波大学で勉強したのも、イタリア時代同様、果樹の専門知識だった。しかしそれ以上に貴重な体験となったのが、日本人への理解を深めることができたことだ。

建明が長い歳月を過ごした南京は、反日感情が強い地域でもある。日本や日本人に対する抵抗感は、間違いなくあったはずだ。

建明が屈託なく答える。

「中国にいた当時は、やはりそういうイメージがありました。でも日本で長いあいだ暮らしていると、だんだんそういう感情も薄れてくるし、好きな部分も生まれてくるんですね。心強かったのは、家内の暁紅も南京農大の卒業生であり、農業に対する理解がもともと深かった。だから

①ハウスは全部で97棟。計2.5haで葉物野菜を中心に約16品目を生産する。②有機JASとJGAPの認証を取得し、輪作技術の確立、技術のマニュアル化にも取り組む。③④スタッフは現在24人。短期間で農業の基礎から実践を学べる「就農塾」も開講している。研修生2年コースを通してユニオンファームのフランチャイズ農場として独立することも可能だ(④左:独立第1号の大木貴行氏)。⑤アイアグリ(株)が運営する「農家の店しんしん」でも販売されている韓国デントンのトラクタも使用している。

ら私の大勝負にもエールを贈ってくれたんです。それに家内が日本語が堪能だったおかげで日本人とのコミュニケーションには何の問題もなかったし、食べ物や道路、住まいなどの面でも、中国よりずっと過ごしやすい環境がありました。私は自分の仕事に没頭するだけで良かったんです」筑波大学への留学を決めたのは、少なくとも研究現場のレベルにおいては中国よりも進歩していたからだ。だがひとたび日本の農業現場に入ってみると、研究者と現場の連携がひどく希薄なことに気づく。日本

梁山泊の生命線を握る男。



には優秀な施設や資材があり、優秀な研究者や技術者も多い。にもかかわらず、施設や資材の効果的な利用はできて、知識が現場に反映されていないのである。

「中国の農業が日本よりも遅れていることは間違いありませんが、中国の研究者や技術者は、日本人よりも多くの現場を見ていると思います。なにしてる13億という人口ベースがありますから、それを支える台所に生産力がなければなりません。だから自国民の食糧をどうするのか。それが中国の農業現場の最初の責務なんです。日本のような自給率になったら、餓死者が続出するのは自明の理です。たとえばユニオンファームが目指しているようなFC事業は、中

国のほうがやりやすいでしょうね。希望者が多いと思いますから。また日本も、ユニオンファームのような現場があちこちにあれば、自然と自給率が上がっていくと思います」

玉造洋祐が付け加える。「たとえば昨日まで製薬会社の営業マンをやっていた人が農業現場を求めてきたときに、そういう人たちを乗せてあげられるような環境が整備されてないんです。その手助けをしてFC化していくというのが、ユニオンファームの狙いです。技術を蓄えてやり、販路も作ってあげて、いかに自己増殖できるかですね。何百年もの歴史をもつてる農家と闘うためには、グループ化していかないと勝ち目がないですよ。独立第1号

を獲得するまでに、設立してから5年もかかりました。その後は年に一人ずつ、3年間続けてきて、今年からは年に3〜4名のFCメンバーを増やすことを目標としています」

ユニオンファームの実験農場では創業当初から6品目を栽培し、今ではその数も十数種類にのぼる。間口は広いが、品目あたりの経験値が低くなってしまっているのは当然だろう。そこで、その欠点を理論で補足できる建明の存在が不可欠となるわけだ。大農家を向こうに回して短期決戦が求められるユニオンファームにとって、彼の知識と経験、そして技術は、梁山泊の生命線ともいえる存在なのである。

アイアグリ入社当時は「研究者」としての肩書きだった建明だが、ユニオンファームでは「経営者」としての顔も持つ。最初の5年間で5000万の赤字という不安なスタート



李 春成

を切ったが、それもここ数年ですっかり相殺された。将来的には日本で得た経験を王千村に持ち帰り、日本と国境を越えたパートナーシップを築くことも可能だろう。「環境保護産業の都」として知られる宜興市で新事業に取り組めば、日本も視野に入れたビジネスの芽も生まれていくにちがいない。

「中国では、有機食品のことを「緑色食品」というんです。日本の農林省にあたる政府の農業部からのバックアップもありますから、中国のこれからの農業は、この分野で伸びていくはずですよ」

「ユニオン」とは、英語で「連合」を意味する。つまり「ユニオンファーム」という社名には、「農場連合」実現への夢が託されていたわけだ。だが、この梁山泊に集う猛者たちは、いまだスタートラインに立ったばかりなのだ。（文中敬称略）

【筆者プロフィール】

1956年、東京都生まれ。「李」という姓は、台湾生まれの祖父に由来する。自称アジア・エスニック・ジャパニーズ。学習院大学卒業後、スポーツ雑誌の編集者を経て、84年のロス五輪を契機にフリーライティングを始める。以後、サッカー、格闘技を中心としたスポーツ分野を柱としながら、カルチャー・エンターテインメント分野においても幅広く活動。著書に「不器用な王者たち」（ぴあ）、「職業・柔道家」（ネコパブリッシング）などがある。